

巻頭言

## 医療における情報開示と病院図書室

名古屋記念病院院長 稲垣 治郎

最近、ビッグバンという言葉が医療の世界にも適用されるようになってきています。

その重要な要素の一つにカルテ開示をはじめとする医療における情報開示が折り込まれているようです。

わが国の医療界において、インフォームド・コンセントの重要性が唱えられはじめてから10年以上が経過してきましたが、カルテ開示の実施が近い将来になされる可能性が高くなりつつあるところまで、情報開示の流れはきているようです。どのような形で実施されるのか、どこまで実施可能なのかは、現在、種々、議論されています。

インフォームド・コンセントとは、医療者が、今、実施することが必要と考える医療行為について、患者に説明するという情報提供を行い、患者が、その説明を理解し納得した上で、その医療を選択し、両者による共同作業としての医療行為が実施されることであります。したがって、その情報は十分に、かつ、正確で、しかも、患者が理解できるものでなくてはなりません。医療者のインフォームド・コンセントに対する意識の重要性が強調されていますが、いくら意識しても、医療者が適切な情報・知識を分量もっていなければ真の意味のインフォームド・コンセントの成立は不可能です。すなわち、質的、量的に適正な情報を確保しておくことが必須です。

医療の世界での最近のもう一つの流れは、

Evidence-Based Medicine(EBM)の重要性が強調されていることです。従来、診断・治療の実施にあたっては、先輩の教え、今までの経験・習慣などに基づいた決定が大きな部分を占めていました。EBM重視の視点は、今、実施せんとする医療が果たして、科学的根拠に基づいて客観的に証明されたものであるかどうかを確認することが必要であるとの考え方です。要は多数の専門家が認める確かなデータに基づいた標準的医療が施行されなければならないということです。

医療の決定の際に、その根拠として、従来、主として使用されてきた経験・常識は全く否定されるものではなく、それらの情報は、耳学問ではなく、科学的根拠をもって公に文献として発表されたデータで確認され、取捨選択される必要があります。

医療者が正確な情報を収集し、専門職としての能力を向上させ、EBMが実施され、その上で、情報開示が適正に行われれば、医療において最も重要な、患者・医療者間の良好な信頼関係が生まれるものと確信します。

そのような図式を成立させるために、医療者にとって情報の源泉の多くは今でも図書室にあると考えます。病院図書室は、コンピュータなどの導入による情報革命により大きな変化を遂げ、以前に比し、その機能は多岐にわたっていますが、日常診療において、科学的根拠に基づいた正確な情報を駆使した医療を実施し、情報を適切に開示していくに

あたって根幹的役割を果たしています。また、将来も果たし続けるものと考えます。

医療ビッグバンのなかで、経済的に厳しい状況に置かれている病院にとって、スペースの確保をはじめ、図書室を満足な形に整備することは現実的には、容易なことではありま

せん。しかし、院内図書室のみならず、情報システムを十分に活用し、可能な限り、努力・工夫し続けることが病院の、また、医療全体の質的向上のために不可欠であると考えます。